

〔徳島県立文学書道館紀要「水脈」第九号（二〇一〇年）掲載〕

小林多喜二の死と貴司山治

貴司を出所とする「党生活者校正刷」（小樽文学館所蔵）をめぐって

伊藤 純

小樽文学館に小林多喜二の遺作「党生活者」の、一冊に綴じられた校正刷が所蔵されている。封筒に収められ、その封筒の表面には中野重治の筆跡で

『党生活者』

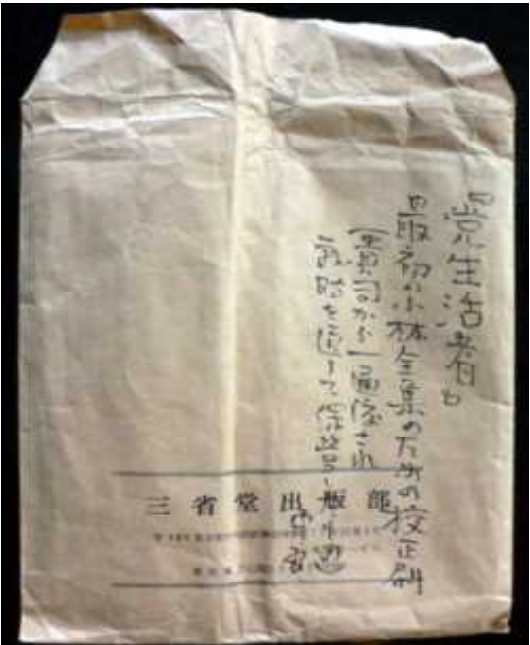
最初的小林全集のための校正刷

（貴司から一通渡され 戦時を通して保管したもの）

中野

と記されている。

内容は、中野とは異なる筆跡の赤字で修正などが書き込まれた小林多喜二の遺作「党生活者」の校正刷であり、きれいに束ねられ、こより綴じされている。版面は、現在広くスタンダードとされる「定本小林多喜二全集第八巻（新日本出版社一九六八年五月刊）」所載の「党生活者」とは細かな点で差異があり、別系統のテキストに基づく版であることが想定される。



（写真1）「党生活者校正刷」の収められた封筒の表面



（写真2）『党生活者』校正刷、赤字で修正やルビ指定が記入されている

いったいこの校正刷はなんのためのものだったのか、これが中野重治の手もとに「貴司から一通渡され戦時を通じて保管」されていたということなのか……

これらを追求していくと、小林多喜二の死を一つの象徴的な出来事とする、ファッションと戦争へ明瞭に転回していく時代に対する関係者の怒りと焦燥、そして十数年後、敗戦によって突然訪れた自由と解放……この波乱の一時代に生きた人々の想いが、この校正刷によって物語られていると感ぜられるのである。

以下、そういう視点からこの校正刷の顛末を検証する。

●「多喜二虐殺」の波紋

一九三三年二月二十日小林多喜二が築地警察署で拷問虐殺されたという事実は、今では広く知られた歴史の一齣となっている。しかし、同時代的にこれを考えてみると、関係者にとつての衝撃は、想像を超えるものだったと思わざるを得ない。

小林の死は、単なる一人の青年左翼活動家の拷問死というものではなかった。プロレタリア文学は今ではあまり注目されることのないカテゴリーだが、当時はそうではなかった。プロレタリア文学は文壇の一角を占める大きな勢力であり、文学雑誌もほとんど毎号プロレタリア文学と分類されるような作品を掲載していた。小林はそこに彗星の如く登場して初版数万部を売る新進気鋭の人気小説家だった。

小林の「蟹工船」は、今になって一種のブームをよぶ作品と化しているが、初版の時点で既に多くの読者を獲得していたのである。その「人気作家」が警察署の奥で殺害され、その真相はニュースに載ることはなかったが、語るべくもない陰惨な事実が隠されているに違いないとは、誰しも想像できたであろう。

まして、実際にその遺骸に接し、悲惨な実状を直視せざるを得なかった関係者の衝撃、しかもそれを一言も世間に語ったり非難したりできない、その怒りと焦燥は想像にあまりある。

遺骸の状況は、警視庁の圧力によって東大、慶応大、慈恵医大に解剖を拒否されたが、江口渙(一)が、小林と同時に捕まった今村恒夫の話や、引き取った遺体を安田徳太郎医師とともに直接調べた所見にもとづいて以下のように記録している。

……警視庁築地警察署において、寒中、丸裸にして細引きで後ろ手に吊し上げ、ステッキや木刀での乱打を皮切りに、気絶すると水をかけて息を吹き返させ、様々な拷問を二時間以上繰り返し、一九三三年二月二〇日午後四時頃、死に至らしめた。

屍体の状況は、顔面に五、六箇所打撲と内出血、首を一周する内出血を伴う

細引きの跡、両手首にも内出血をとまなう索状痕、下腹部、太股は一面に暗紫色の鬱血状態で、腹、太股、陰茎、辜丸までがはちきれそうに膨満し、異常な大量の内出血が下半身全部に充満し、内臓や腹部の血管が激しく損傷していることを思わせた。

さらに、太股には錐か釘を打ち込んだと思われる皮膚がやぶれ肉が露出した穴が十数箇所も認められた。脛には角材などの強圧でできたと思われる削り取られたような傷跡がいくつもある。

さらに多くの人々に惨劇の極地を感じさせたのは、右人さし指の骨折である。これは指を逆方向に強引に折り曲げてへし折られたものと考えられた。

〔江口渙「われらの陣頭に倒れた小林多喜二」定本小林多喜二全集第十五巻、新日本出版社1969刊、152-154頁……から要約〕

①江口渙 1887-1995 プロレタリア作家、一九三〇年日本プロレタリア作家同盟中央委員、小林多喜二の死に際しては葬儀委員長、戦後は部分核停問題などで新日本文学会から除名され、中野重治らと袂を分かつ形で日本民主主義文学同盟議長となる。代表的作品は「我が文学半生記」「花嫁と馬一匹」など。また、戦前戦後を通じて小林多喜二の死の真相を追求記録した。

●惨劇の直後に書かれた貴司の小説「子」

貴司は、この惨劇の直後に、暗喩に満ちた小説「子」②を書き、それは同じ年の八月に雑誌『改造』に掲載された。この小説は、貴司が地下潜行中の小林から連絡を受け、渋谷で密かに会う情景が重要なエピソードとなっている。

②初出『改造』一九三三年八月号。伏せ字を起した復刻版は「貴司山治小説集・丹波アリラン」(二〇〇六年十一月、伊藤純刊)およびインターネット上の「貴司山治net資料館」(<http://www.kisiyamaji.com>)に掲載。

この密会で小林は、非合法地下生活という困難な状態の中で、社会主義者としての大義に殉じる困難な地下活動をしながら小説も書くという超人的な苦闘と、母親への愛という私的生活を両立させる、前人未踏の戦いに正面から挑んでいることを話す。そしてその挑戦に半ば成功を納めつつあるということを縷々として語る、ナイーブで人なつこい青年として描かれている。この小林との密会は虚構ではなく実際にあつたことが一九三四年三月二六日の貴司の日記に記述されている。③

③貴司山治日記一九三四・三・二六の項に――

「小林は出獄早々の(一九三三年一月頃・伊藤注、以下同)私をよびだしての話に、作家同盟のフラク(*党メンバー)たる鹿地(*鹿地亘)と対立し、自己の方針を伝えることができ

なくなつて、私を中央部に入れ、鹿地に当たらせようとした。F(*フラク)でない人間をFである人間にあたらせるために使うというのは組織的に大きな間違ひで、そんなことよりもまづ鹿地の組織的処置が先決問題だといって私ははねつけた。それから十日程して小林は殺され……」

とある。「貴司山治日記(一)」「国文学(関西大学国文学会)2008年81号、133頁)なお「貴司山治全日記」は二〇一一年一月、DVD版で不二出版株)から刊行されている。

そして、小説の最後の暗く長いシーンは、虐殺された小林の自宅での通夜の場面である。そこで貴司は小林の遺体と対面する。その遺体は――

「三尾は少し蒲団をめくつてかれの胸の所をはだけてみた。……ついこの間の血色はそこには失はれてゐた。そして何の真似か、バンソーコーの小さなきれつぱしが左の乳の下にはりつけてあった。」(下線は初出改造誌上で伏せ字とされた部分)

と書かれているだけである。いうまでもなく遺体は「バンソーコー」一片というような生やさしい状況ではなかった。遺体は激しい内出血で赤黒い袋のような状態になっており、既に屍臭を発しつつあったのだ。

しかしそれを「バンソーコーの小さなきれつぱし」としか書くことができず、それも伏せ字にせざるを得なかった、正にそのような時代の最中に人々はいたのだということ認めなければならぬ。

この小説は、一つには、暗く緊迫した小林の通夜を描くことで、惨劇に直接言及できぬ言論圧政下で、ぎりぎりの暗喩を込めてその非業の死を書き留めるという意図と、もう一つ、渋谷の小料理屋で密会した小林に語らせるといふ形でその遺作「党生活者」の主題を補完説明するという意図も込めていたように思われる。

「党生活者」は、一九三二年八月、中央公論社に入稿されたが掲載が留保されていた。そうしている内に小林は殺されてしまう。おそらくそれが関係者への衝撃となつて、発表への努力が始まり、『中央公論』一九三三年四月号と五月号に掲載される。しかしそれは、題名も仮題(転換時代)とされ大量の伏せ字を伴うものだった。これは貴司と立野信之(4)中央公論編集部(担当者は中村恵)が相談した結果で――

題名の改題は、作者の没後、編集者と作家同盟(5)の貴司山治、立野信之との協議によるもので、四月号編集後記に「作者の原題は時節柄許されざるもの、題名変更就いて作者の許諾を得ながら決定せざる中に彼の死となつた。『転換時代』は仮題なることを読者は諒せられたい。」と記されている。(6)

というもので、題名は変えられ、本文も意味が読み取れぬほど伏せ字だらけだった。

(4) 立野信之 1903-1971 戦後「叛乱」で直木賞受賞。戦前小林との共著もある親友だったが、一九三一年に転向している。

(5) 作家同盟 日本プロレタリア作家同盟 一九二八年三月に結成された全日本無産者芸術聯盟(ナツプ)の主要な下部組織。一九二九年二月正式に独立して日本プロレタリア作家同盟となった。しかし、厳しい弾圧と政治主義的指導の弊によって作家が離散、一九三四年二月に解散した。

(6) 定本小林多喜二全集・第八巻解題、新日本出版社1969刊、221頁

この伏せ字の多い「党生活者(転換時代)」の、中央公論掲載の数ヶ月後にかかれた貴司の小説「子」は、伏せ字で埋没しそうな「党生活者」の主題の一端を明らかにしておく、という意図も感じられるのである。

●「党生活者」原文の保存秘匿と刊行の努力

さらにこの時点で、官憲の圧迫に抗して伏せ字のない原文を保存秘匿しようという努力がなされた。まず、中央公論掲載のための、伏せ字設定前の組版から、数部の校正刷がひそかに作成され、関係者の手もとに分散して保管された。一般にその部数は四部と伝えられているが明確ではない。ただ、少なくともその一部が徳永直の下に届けられ、それがその後の全集などの底本となっていく。(7)

(7) 定本小林多喜二全集・第八巻解題、新日本出版社1969刊、222頁

この校正刷分散保管は中野重治によると――

「……貴司の才覚で伏字なし校了グラ何通かにして戦後まで分散保存された……」

と記されている。(8) 但し一九三三年には中野重治は未決拘置中でその場にいわせることができなかったから、伝聞であろう。

(8) 中野重治全集第一四巻 筑摩書房1998刊、381頁

更に一九三三年四月には、作家同盟が小林多喜二全集発行を計画し、「蟹工船」と「不在地主」を収載する第二巻だけが刊行された。ただその時、刊行にいたらなかった「党生活者」も組版が行われ、その紙型も、前述の『中央公論』本誌のための伏せ字前校正刷りとともに、いずれかに秘匿された。

つまりここで、「党生活者」に関しては、『中央公論』本誌用の校正刷りと、作家同盟

版全集用の紙型、という二種類の版が生まれたのである。

そして、この紙型秘匿に関しても、貴司が関係していたということは当然考えられる。この時作られた紙型が、どこにどのような形で秘匿されていたのかは未だに明確ではないが、戦後忽然とそれが現れて出版に付される経緯と絡んで、貴司の関与を想定せざるをえない。

いずれにしても、多喜二の遺作である「党生活者」は、校正刷の分散秘匿と、紙型の秘匿保存という形でその伏せ字のない原文が守られた。

ただ、一九三三年に計画された作家同盟版三巻全集が、第二巻を出しただけで頓挫した事情については、「公式見解」としては厳しい「弾圧のため」⁽⁹⁾とされるのが一般的のようで、大状況としてはその通りだと思われるが、運動史的には異なる問題点があったことに注意すべきである。

⁽⁹⁾例えば「定本小林多喜二全集第四巻・解題」(新日本出版社1969刊、221頁)では「弾圧のため続刊できなかった。」と記されている。

また、「小林多喜二の今日における意義 宮本百合子」(小林多喜二全集月報第二号、新日本文学会666刊)では、作家同盟版の頓挫は、弾圧におびえて上部団体を非難ばかりしている下部組織の怠慢と決めつけている。

この問題点を指摘する文言の一つは、戦後貴司が書いた小説「一九三三年」に書き留められている。この小説の中に――

「多喜二全集発行业は大衆団体に任すべきではなく、共産党中央が直接行うべきだ」という介入によって作家同盟から取り上げられたが、実際には党中央に編集発刊の能力はなく頓挫した。その後、党中央委員となって地下潜行中の宮本顕治と貴司が密会し、発行业を再び合法世界に戻すことになり、貴司が引き受けた」

という意味の記述がある。⁽¹⁰⁾

⁽¹⁰⁾戦後に書かれた貴司の小説「一九三三年」の関連部分――共産党中央委員となって地下潜行中の宮本顕治と密会しての会話の一部。

「もう一つ、君に成田(*小林多喜二)の作品全集刊行の仕事を引きうけてもらいたいんだ」

「フーム……」

伊達(*貴司)は唇をかたく閉じて苦渋の顔をした。

成田の死後、作家同盟では成田健全集出版の計画を立て、その第一巻をすでに出した。

すると、もぐつている池上が文化連盟(*作家同盟の上部団体・プロレタリア文化聯盟)の書記長をかねていて「成田の全集は文連で出すべきだ」と猛反対をして、第二巻以後

の刊行がとまっていた。きけばその後それは党中央委員会が刊行するのが正しいという事になって文化連盟でも手をつけないでいる……という話を伊達はきいていた。まさかと思つた。

「それは党中央部で出すことになっているんじゃないか」

高宮(*宮本顕治)はうなづいて

「しかし力が足りなくて、今すぐ出せそうにもない。結局ぼくに一任ということになった。で、ぼくの責任において君にやつてもらいたいんだ」

伊達は高宮の話がもどかしくなつた。

「非合法出版が可能な状態かどうか、考えてみなくちゃ……作家同盟にやらせておけばもう第三巻ぐらいは出せていたと思う。それをして党中央委員会刊行とすることによつて、合法的に読める成田の作品集を全部非合法化してしまうことになる。その必要があるのかね。もし成田の作品をより広い大衆に読ませるようになるのが目的なら、文連は勿論、作家同盟で出すのすらやめて、普通の商業出版社か、超党派的大衆の手による成田全集刊行会かをもうけてそこでやらせるようにするのが本当だと思うがネ、ぼくの考えは『右翼』的かしらん」

「何しろぼくが一任されているので、君の意見を土台に二人で考えてみよう」

この小説は前記の小説集「丹波アリラン」に収載。またインターネット上の貴司山治.net資料館 (<http://www.kisiyamaji.com>) に掲載。

この談合の結果と思われるが、一九三五年になってナウカ社から三巻本の、小説だけに限つた小林多喜二全集が刊行された。この全集では「党生活者」は中央公論の校正刷を底本にし、雑誌掲載分よりは伏せ字は少なくなつている。

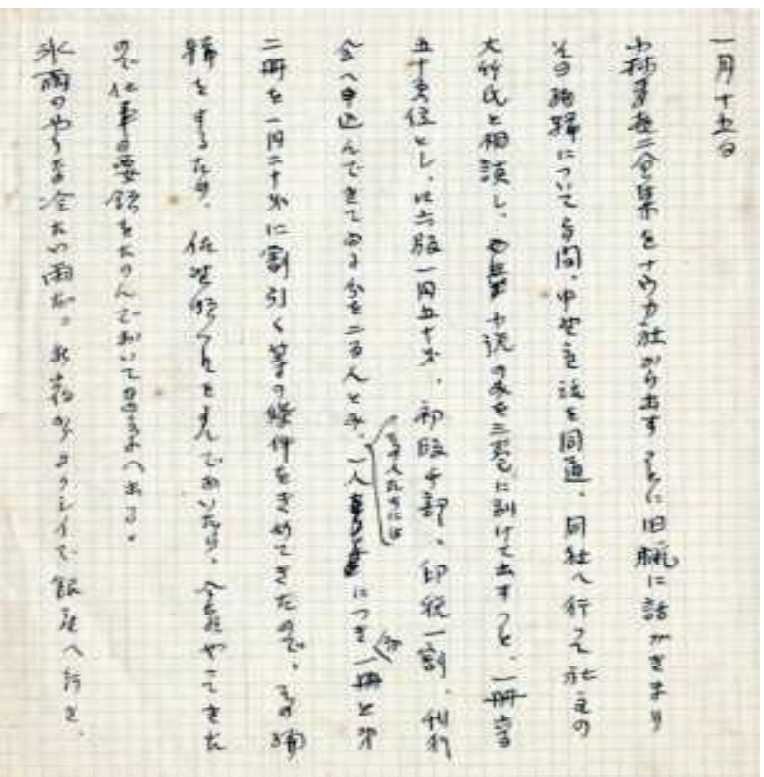
これによつて、官憲の抑圧の厳しい時代の中で、ともかく小林の作品集を刊行しようという虐殺直後に関係者を捉えたであろう初一念が実を結んだといえる。

(写真3 一九三五年一月十五日、全集発刊決定を記録した貴司日記)

だといえる。

この刊行に、貴司が深く関係していたことは、小説だけでなく日記から明らかになる。

このナウカ社からの刊行は、実質的に貴司と中野重治がプロモートし、佐野順一郎(高知出身のプロレタリア作家、貴司家に長く居候していた)が実務を担当したことをうか



がわせる文言が貴司の日記に記載されている。(11)

(11) 貴司山治日記一九三五年一月十五日の記事。

「小林多喜二全集をナウカ社から出すことに旧臘に話がきまりその編輯についてこの間、中野重治を同道、同社へ行って社主の大竹氏と相談し、小説のみを三巻に別けて出すこと、一冊六百五十頁位とし、四六版一円五十銭、初版千部、印税一割、刊行会へ申し込んできている分を二百人とみ、その人たちには一人につき第一冊と第二冊を一円二十銭に割引く等の条件をきめてきたので、その編輯をするため、佐野順一郎をよんでおいたら、今朝やつてきたので仕事の要領をたのんでおいて東京へ出る。」

(「貴司山治日記(四)」国文学(関西大学国文学会) 2003年86号、24頁)

*なお二〇一一年一月刊の「貴司山治全日記・DVD版」にも原文収載。

●戦後・民衆書房版「党生活者」の登場

戦後、「党生活者」が、持っているだけで検挙されるという時代が終わり、最初に刊行されたのは一九四六年五月の新興出版社版で「一九二八年三月十五日」と「党生活者」の二作を納めた単行本だった。そしてこれは、戦前のナウカ社版と同じ中央公論本誌の校正刷を底本としたものであり、新日本名作叢書と銘打ち、編集者として徳永直、中野重治、壺井繁治の名が明示されているし、壺井繁治の後書きもある。新興出版社は当時社会主義系統の書籍をいろいろと出版しており、「党生活者」などを収載したこの本の刊行の背景も概ね想定できる。

ところがその半年ほど後、一九四七年一月に、突然、大阪の民衆書房という小さな出版社から「党生活者」だけを納めた一冊が刊行される。この本は、編者の表記も出版の経緯を説明する前書きや後書きも全くない。奥付によれば、発行者が「牧野弘之」、印刷所が京都の「(株)前田進行堂印刷所」であることが記されているだけである。民衆書房は大阪

郊外の貝塚市に所在し、その出版

物も児童図書が数冊、国会図書館

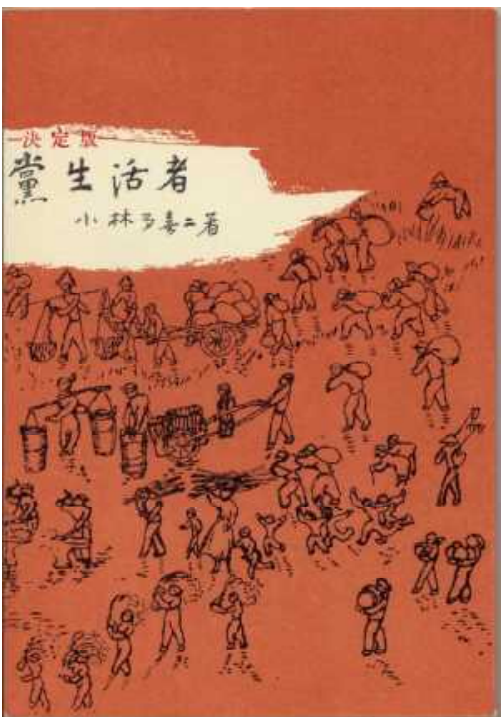
や大阪府立国際児童文学館(二〇

〇九年末で休館)で検出できるだ

けで、会社は現存していない。ま

た、前田進行堂印刷所も既に無い。

出版の経緯を想定させる手がかりが何もない中で、版面をよく見ると、何故か三十二頁までの見開きに「小林多喜二全集」という文字



(写真4 民衆書房版『党生活者』の表紙。一九八〇年ほるぶ出版によって復刻版が刊行されている。)

が印刷されている。これも大変不可解である。

「定本小林多喜二全集」の手塚英孝の解題では、この民衆書房版は、作家同盟版の紙型によって制作されたのだ、ということが指摘されている。だとすれば、作家同盟版は三巻本の全集を予定したものだから、紙型の中に「小林多喜二全集」という肩書きが入っているもおかしくはない……そうはいつても、本来は紙型を単行本に転用する際にそれは削り取るべきものだと思うが、それが途中まで残っているというのは、何らかの意図があつて残したのか、杜撰な編集校閲で見落とししたのか今となつては分からない。

ところが、奥付にある「牧野弘之」と
「(株)前田進行堂印刷所」という二つの
固有名詞から、当時の貴司との関連が想
定される意外な符合が発見された。

当時（一九四六〜一九四七年）貴司は
丹波山中で開拓農業に従事するかたわ
ら、京都に事務所を設けて「東西」とい



(写真5 雑誌『東西』創刊号表紙)

う文学雑誌を発刊していた。その編集長と印刷所が、民衆書房版「党生活者」の奥付に書かれている固有名詞と同じなのである。（左頁・写真6）

「牧野弘之」は大正末年頃からの貴司の知友であり、一九四七年頃には雑誌「東西」の編集長であると同時に、大阪の共産党の文化部門の活動家だったようだ。（12）

（12）一九六〇年代後半に書かれたと見られる自伝的遺作「私の文学史」（未刊）に牧野弘之の想
い出が記されている。

「私はかれ（牧野弘之）の長兄高橋誠之の大阪時代の友人で、誠之には二人の弟があり、上
が勝之、下が弘之で、二人とも幼い時からの顔なじみだ。というのも、この兄弟は中学時代
にはアナーキストで、サッコヴァンゼツチ死刑反対のビラをつくってまき、警察につかまって退
学させられたのを、長兄の誠之が「どうしたもんだらう？」と私に相談にきて、私が兄弟を
「指導」することにして身柄を預ったのである。今、勝之は党中央部員で「政治経済資料」の
編集をしているが、弟の弘之は労音の全国事務局長である。」

「私の文学史」は未刊だが、貴司山治net資料館に掲載してある。

<http://www.kisiyamaji.com> 「私の文学史」第五章三節

なお、本稿執筆後に発表された和田崇氏の論文によると、民衆書房は牧野弘之が作った出
版社であることがほぼ確定的とされている。（和田崇「資料紹介・文学雑誌『東西』解題・総目次
・索引」立命館文学618号 2010年10月223頁下段）

日記にも、一九四八年十二月十七日の項に「共産党大阪地方委員会の事務所へ行き、牧

野弘之をよび出して小林多喜二著作物印税のあと始末の要談。」と書いてあり、年の瀬を迎えて小林家に何らかの印税支払いの用件があったらしいことがうかがえる。



(写真6 民衆書房版「党生活者」と雑誌『東西』の奥付。牧野弘之と前田進行堂印刷所が共通である。)

の内容とは全く無関係な、農作業風景の群像のようなものが線画で細かく描かれている。これらを見ているとふと、思い当たるものがある。

貴司は一九四六年四月十八日から七月五日の間、読売新聞（連載開始時は読売報知）に「愛の歌」という連載小説を書いていた。この連載小説は当時の読売争議に巻き込まれて中断し未完となるが、この挿絵を丸木俊子が描いた。丸木は連載に際して丹波の開拓地を訪れ、あまりの貧しさに驚きながら開拓地を見聞して回った。（私自身が周辺を案内した記憶がある。丸木氏は後にこの見聞を小さな水彩画にして贈ってくれた）こういう背景を思うと、时期的な一致もあるので、「党生活者」表紙の農村作業風景は、丹波の開墾地を訪れた丸木俊子が書いたものではないか、という想像も可能になる。そう思ってみると、群像の扱い方など、「原爆の図」を書いた丸木俊子の筆致を思い起こさせるものがある。さらに、丸木美術館で調べたところ、この約一年前に刊行された新興出版社版多喜二小説集（「一九二八年三月十五日」と「党生活者」を収載）には、雰囲気がよく似た装飾力ツトが描かれており、丸木俊子画と明記されている。これらのことから、民衆書房版の装丁画は丸木俊子の描いたものにほぼ間違いないと考えられる。

以上のことを総合して考えると、民衆書房版の「党生活者」は貴司が当時大阪の共産党文化部の働き手でもあった牧野弘之と語らって、どこからか戦前に秘匿されていた紙型を持ち出し、刊行した可能性が非常に高いといわざるをえないのである。

れているので、小林家との印税の約束があったことが推測できる。また、民衆書房版「党生活者」は、どこにも装丁者の表示はないが、その表紙をよく見ると誠に不思議なデザインである。（写真4参照）少なくとも「党生活者」

●小樽文学館所蔵校正刷と民衆書房版「党生活者」の一致

このような流れの中で、小樽文学館所蔵の古い校正刷はどのように位置づけられるものなのだろうか。この校正刷は、「党生活者」の前記の諸版と照合してみると、民衆書房版の版面とほとんど一致するのである。しかも、民衆書房版は、小樽の校正刷に記入された赤字通りに修正されている。

このような、紙型作成以降の版に対する修正は、印刷博物館⁽¹³⁾で確かめたところでは、鉛版を切り貼りする「象嵌^{ぞうがん}」といわれる手法である程度可能だとのことである。

(13)印刷博物館 東京文京区の凸版印刷内にある博物館。

以上のような検討から、中野が封筒に上書きした「最初的小林全集のための校正刷」の意味がはつきりする。つまり「最初」とは、一九三三年に一冊のみで頓挫した作家同盟版三巻全集のことで、その組版からの校正刷だ、とだめ押ししていることになる。それは、一般に伝えられている「数部作って分散保管した」という中央公論本誌のための組版からの校正刷とは別に、作家同盟版の組版ないし鉛版からの校正刷が貴司から中野に渡されていた、ということを示している。

このように考えると、民衆書房版「党生活者」は、中央公論掲載用組版からとられた校正刷から手塚英孝⁽¹⁴⁾校訂によって「定本版」となっていく「党生活者」テキストの流れとは異なる――

原稿↓作家同盟版組版↓紙型↓

↓貴司と中野による校訂↓民衆書房版「党生活者」単行本

という別系統の版本だということになる。

(14)手塚英孝 1906-1981 戦前から社会主義者として活動。戦後は小林多喜二の資料、文献研究の第一人者となり、現在の小林多喜二作品全般にわたる基準的テキストを作り上げた。

●新日本文学会版全集編纂事業と貴司

その後、一九四八年〜五一年に当時の左翼系文学者の中心的団体であった新日本文学会で、戦後最初の小林多喜二全集が編纂刊行される。この編纂会議は当時日本共産党幹部会員だった蔵原惟人宅で頻繁に開かれているが、この編集作業の事務局長的な役割を担ったのが手塚英孝である。貴司は、一九四七年十一月二十五日に手塚の訪問を受け、この編集委員会への参加を要請され、応諾する。その時が手塚との初対面だった。

その後、時には大阪まで手塚と同道して調査に出かけたりもしている。(15)

(15) 貴司日記一九四八年十月六日。東京から来た手塚と大阪梅田で落ちあい阪急甲東園の関西学院大教授川並秀雄氏宅を訪問、小林の「オルグ」の完全ノートの存在を確認し、原稿用紙一枚十円で筆写を依頼している。(「貴司山治全日記・DVD版」所載)

しかし、一九四九年春頃から貴司・手塚の間はしだいに不和になっていく。日記などによると、それは、ルビなどを多く振ってなるべく読みやすくしようという貴司と、原典にできるだけ忠実に編集しようとする文献性重視の手塚との考え方の対立が原因と見られる。(16)

(16) 貴司日記一九四九年三月八日。東京青山の小林三吾(多喜二の弟)宅を蔵原、手塚と共に訪れ、全集印税の一部二万円を三吾、多喜二の母セキに渡した後、貴司の持参した第三回配本「評論集」の打合せをする。

そこで「わけのわからぬところや、ひどい誤謬のところを」「そのまま刊行しようとする手塚」と対立する。日記文中にはあるが貴司は手塚にたいし「へんきょう」「デマゴギー的傾向」と人格的罵倒の言葉を重ねているので、席上でも手塚に相当のことをいったのではないかと想像される。公平に見て、故人である小林の文章を刊行するに当たっては原文を尊重するのが当然で、手塚の態度は編纂者として当たり前と思われる。偏った思いこみで人を罵倒するのは貴司の大きな悪癖であり、多くの人と不和になる最大の要因である。ここでもその悪癖が露呈されている感が深い。この対立が、自ら小林全集編纂の仕事から疎外されていく要因になっていったと思われる。

しかし、当然のことながら文献性を重視したテキストを確立していかうとする手塚の立場が、全集編纂にとっては原則であり、貴司の「分かりやすく」というような仕事は別次元のことである。貴司の主張は全集編纂に関しては無理がある。それかあらぬか、次第に貴司は小林全集編纂事業と疎遠になっていったように見える。(17) こうして、小林多喜二全集の手塚英孝校訂による「手塚テキスト」が確立していったと考えられる。

(17) 戦前戦後の「小林多喜二全集」編纂事業と貴司山治の関わりの詳細については、このNet資料館に掲載している

小林多喜二全集の編纂過程〔戦前編〕——貴司山治資料などからの検討

小林多喜二全集の編纂過程〔戦後編〕——貴司山治日記にみるその表裏

を(1)参照下さい。

それにしても、戦後二年と経っていない、出版用紙の配給割り当てを受けるのも困難な物資欠乏時代の焦土の大阪で、それより十数年前、ファシズムに突入しようとする時代に秘匿されていた「党生活者」の紙型が姿を現し、出版されたのである。そして、その出版には貴司、牧野弘之、中野重治らが関わっていたのではないか、と考えられる。

結局、民衆書房版「党生活者」は、多喜二虐殺の暗い衝撃が、十数年の沈黙を強いられた後、戦後の自由の空気の中で関係者を突き動かし忽然姿を現したものの、ともいえる。農作業のイラストを纏った小さな冊子は、そのような時代の空気を一杯に伝えているようにも感じられる。

しかし、この「最初の作家同盟版全集テキスト」ともいうべき「民衆書房版党生活者」のテキストは、その後、継承されることはなかった。ただ「定本・小林多喜二全集」の解題に、定本版との異同が表となって掲載されているのみである。

写真7 貝塚駅前の民衆書房があったと思われる場所



(11010年11月) (20157 小訂) (伊藤純 昭和文学研究 貴司山治長男)